

東彼杵 ダラフ

21/23郷 瀬戸郷



明るく楽しいガイドに会い、
魅力いっぱいの散策になった瀬戸郷。
旧米倉庫のとびらはふたたび開き、
にぎわいを創り出す光が差した。

笑顔に なれる 町のとびらが ひらく



12月16日、「Sorriso riso(ソリッソ リッソ) /ちわた米創戸」が瀬戸郷の国道34号沿いにオープンした。運営するのは、町内のまちづくりグループ「長咲プロジェクト協議会」(藤澤恭匡代表)。これまで、映画『ふるさとがえり』の上映会開催をはじめ、七夕まつりなどで数々の支援を行い、町を元気にするため精力的に活動してきたグループだ。

Revives(リヴァイヴス)=よみがえる。役目を終えて、ただ壊される日を待っていた旧JA千綿米倉庫。ここを再生することは、彼らが提唱する「Re+プロジェクト/Re·vives」にぴったり合った。「個々や団体ごとでまちづくりやイベントをやっている、いずれはきつくなるだろうと思っていた。自然に人が寄れて、町のことをみんな考える場を作らなければ。そんな時、ここが取り壊されることを知り、自分たち

が手を挙げた」とプロジェクトリーダーの森一岐さんは話す。

古い建物をよみがえらせて、地域をよみがえらせるための拠点にする。「倉庫を整備するにあたっては貴重な町のお金を使わせていただきました。正直、自分たちだけでした方が楽だったかもしれません。町のお金でここを作る意味を、みなさんに伝えたかった」と森さん。

「個人でしとったら興味がない人は見向きもせんでしょ。そいが町のお金だと、なんでこげんなことに使うんだという意見も当然出る。だけん、そういう人がおるっているのが大事かと思う」と藤澤さんが続けた。地域をよみがえらせることは1人でも数人でもできないと考えた結果だった。

生まれ変わった“米創戸”は、かつてここを利用していた人たちには懐かしくあり、新しい世代にとってはレトロな風合い

が素敵に感じられる空間。「明るくなった。なんかわくわくするね」「この窓がこがんで見られるとは」。初めて中に入った人の声はさまざま。



内装や各お店はメンバーによるほぼ手づくり。多くの助っ人にも支えられた



▲一枚岩の団結を誇る
「長咲プロジェクト協議会」の
森一岐さん(左)
藤澤恭匡さん(右)

▲フリースペースでは
早岐で人気のカフェや、
そのぎ茶生産者が
オープニングを盛り上げた



▲上から
有名店から晴れて独立した
「Tsubame coffee」の
北川真由美さん

家主と移住希望者の
つなぎ役を目指す
「GONUTS」の
沖永雅功さん

「SOLE」の中島陽介さん
は長崎和牛など革を卸す
システムを模索中だ



2階にあがれば天井の梁や小窓が間近で見られる。もともとここにあった物語は大事にしたいという思いから、外も中もあまりいじらずにできる限り当時のままを残した。「天井の新聞紙は、防虫駆除のために旧農協職員が総出で貼ったものと教えてもらった。そういう昔の話もどんどんしに来て欲しい。地域の人が寄れる公民館のような場所にもしたいから」と藤澤さん。

館内には、コーヒースタンド「Tsubame coffee (ツバメコーヒー)」、革製品「SOLE(ソール)」、アンティーク家具・雑貨・古着「GONUTS (ゴナッツ)」の3店が常設する。

「なんでお茶でなくコーヒーの店を入れたのかとよく言われます。東彼杵町はお茶処なので、お客さんは相当期待してきます。それに応えるには、お茶農家さんやインストラクターが本気で淹れたものを

出し続けなければなりません。イベントなどではお願いして来ていただきますが、基本はバリスタが淹れた美味しいコーヒーで語らう場にしてください」と森さん。

「SOLE」ではそのぎ茶染めの革製品などを販売。さらに、長崎和牛やイノシシの皮をなめして商品化する準備中とのこと。また、気軽に参加できる小物づくりのワークショップも開催予定だ。

プロジェクトがカタチになり動き出したことで、森さんの頭では次の展開を整理しているところ。3店をつなぐフリースペースで何をしようか、子育て中ママの手作りお菓子を販売したいなど。

「Sorriso riso」の周辺の整備もそのひとつにある。「GONUTS」には、「Re:novation (リノベーション)」や「Re:make (リメイク)」のプロデュースもお願いしています。私たちプロジェクトの理念の「Re」です。町には

空き家が多いのに、ほとんどが貸せる状態にないと聞きました。もし不要な家具があればこちらで引き取ります。傷んだところは改修します。町の空き家や空き店舗の補助金を活用して、まずは周辺の古民家を改修する予定です。空き家や空き店舗が再生するモデルを作り、町へ移住する人も増やしていけたらいいなと思います」。

「Sorriso riso」はイタリア語で「米のほほえみ」という意味。オープン日には、お米ではなく待ちわびた多くの人が集まった。「町の農産物で商品開発などをしながら、情報発信もする町のとびらでありたい。常にサプライズな仕かけも考えているので謎めいた秘密のとびらでもあります(笑)」と森さんはにっこり笑う。みんなが笑顔になれるまちづくりへ、小さな拠点の戸は開かれた。



牛飼いさんに行く わくわくツアー



↑上から

「牛飼いさんたちが集まる時にまたおいで～」と清心由紀美さん。“おもしろか”ツアーでした

野田勇さんは元農協職員で旧米倉庫に出入り。「情報を発信する場になるのはよかこと」

「川棚など町外へ卸しに行っていたのを思い出します」と当時の木杵を持つ馬場房代さん

東彼杵町のあるある。国道から少し入ると、すぐにのどかな農村・漁村の風景になる。瀬戸郷もそうだった。喧騒を離れて千綿川の土手を歩いた。小さな石橋から見下ろすと、立派な鯉が悠々と泳いでいる。観賞用らしい。

東彼牛（長崎和牛）の畜産農家、清心由紀美さんを訪ねた。各郷を歩く中で、私たちは最初に出会う“第一郷人”をととても大切にしている。瀬戸郷では、“おもしろか”と聞いていたので真っ先に会いたい人だった。

「なんね～、来るなら電話をせんばあ（笑）。美容室行って、振袖着て、ダイエットして待っとるのにさ（笑）」ととにかく明るい清心さん。ご主人は肉牛共励会に出ているため不在という。「ここいらで牛飼いさんは5軒。みんなで協力して、体重を量ったり、爪を切ったりしよるですよ。そういう時に来んばあ（笑）」。

ほかにも、瀬戸郷についてあれはこれとは教えてくれるが、知らないことが多く首を傾げていたら、軽自動車のエンジンをかけてくれた。畦道を軽快に走り、小高い山の近くに出た。「こっちにもあるとよ、大神宮。

区長の野田勇さんがよう知っとらす」とのこと。大神宮は大村湾パーキングの近くにもあるが、ここは初めて来た。“バカ”が付くから気をつけてと言われながら、急な参道を登る。

野田さんの話では、「昔からうちが管理しとったですよ。毎年12月10日には大神宮関係者が寄ってお火炊きをする。お参りした後に酒を飲むんやけど、その時になますを振る舞う。手なますと言って、なますを手のひらにのせて、そいを食べながら飲むのが決まり」。

なかなか取れない“バカ”を払い、ふたたび車内へ。その後も、ツリーハウスが作れそうなくらい大きな楠や、大村湾が大きく見える展望地、そうめんやまんじゅうを製造していた旧馬場製麺所などへ清心さんが案内してくれる。最後のおすすめスポットは、「どうなるのか私も楽しみ」と言う「Sorriso riso（ソリッソ リッソ）」だった。

※瀬戸郷へは、町営バス「瀬戸」「片平」のバス停を利用。

次回は法音寺郷。お楽しみに！